

精華町の保健師になって7年目になる。それまでに、大学病院で看護師を4年間、その後、京都と滋賀の二つの市で計2年間、保健師を務めたキャリアを持つ。

「若手でもよい意見やアイデアはどんどん採用してもらえる、風通しのよい職場です」

昨年、健康推進課に異動となり成人保健を担当している。今年、力を注いだのが特定健診の受診率アップだ。健診の申し込みをしていない40代～50代の人には全員に個別通知を出し受診を呼びかけた。健診期間中にこの通知を持って役場にさえ来れば、あらためて申し込みをしなくても即受診できるような態勢を組んだ。

「40代～50代は働き盛りで自分のことがつつい後回しになってしまいがち。家族のためにも自分の体や健康に関心を持っていただきたかったんです」。前年より全体で250人も新規受診者が増え、このうち100人が40～50代だったという。特定保健指導の企画も管理栄養士を含めたチームのみんなで何度も話し合い、「町内のフィットネスクラブとタイアップすることで、若い世代の参加者を倍増させることができました」。

「地域の人たちと向き合いそこから見えてきた課題を絞りこみ、みんなで練って練って事業を展開する、それが行政保健師の醍醐味だと思うんです」。語る言葉に熱がこもる。

健康推進課では、住民が主体となり保健師と協働で健康づくりに取り組む五つのプロジェクトを進めている。村吉さんが所属しているのは「わくわく健康里山の会」。町内の畑で季節の野菜などを植え、みんなで収穫を喜び合い、里山を散策する。「精華町が目指している健康づくりは、病気の予防と元気の増進。里山での活動が健康づくりにつながるのはこのためです」。町では『せいか365』運動として職員が部署を越えて住民の健康づくりに積極的に取り組んでいる。

「私の息抜きですか?」「勉強です」。2年前に大阪大学大学院の「健康医療問題解決能力の涵養」の科目履修を修了し、現在も時間を見つけてはセミナーに参加している。健康の社会的決定要因を幅広く考える「社会疫学」について学んでおり、「中でもいま興味をもっているのが『健康格差』とそれに伴う公共政策のあり方です」。新しい知識に対するどん欲な姿勢に、ただただ脱帽。



保健師 最前線

地域と向き合う、

行政保健師としての醍醐味実感中

精華町 ^{むらよし} 村吉 ^{りえこ} 里恵子さん



役場内で『せいか365』運動の取り組みを実施している